

# 梅雨明け後の高温・少雨に備える農作物等の対策

## 農業技術情報（第1号）

6月28日、気象庁は「近畿地方が梅雨明けしたとみられる」と発表しました。統計開始以来、最も早く、梅雨期間も14日間と最短となりました。府内では降水量の少ない状態が続いており、5月以降 6月29日までの降水量（積算）は平年の5割程度のところが多くなっています。

また、京都府地方気象台が6月28日に発出した「少雨に関する京都府気象情報 第1号」によると、降水量の少ない状態が、今後10日間程度は続くと予想されています。農作物や水の管理に注意してください。また、暑熱環境下の作業では、熱中症対策として、長時間作業を避け、こまめな水分と塩分の補給や休憩を取るよう心掛けてください。

### 1 水稲

- (1) 生育前半が高温傾向で推移した場合には、稲の生育が旺盛となり、過剰分けつや籾数過多を招き、乳白粒等を増加させる事例が見られることから、中干しの徹底などにより莖数・籾数の適正化に努める。ただし、農業用水の不足が見込まれる場合は、中干しよりも用水の確保を優先する。
- (2) 幼穂の状況を確認して、遅れないように穂肥を施用する。なお、一発型肥料を使用した場合でも、生育診断の実施による適切な追肥に努める。
- (3) 農業用水の有効な活用について地域内で話し合いを行い、特に、最も水を必要とする出穂期前後に水不足にならないように留意する。
- (4) 台風の接近前に、あらかじめ、排水路、ほ場内の排水溝等の点検及び補修整備を行うと共に、台風通過後は、排水路の浮遊物や泥を除去し、速やかな排水に努め、できるだけ稲の葉を水面に出すようする。

### 2 豆類

- (1) 梅雨明け後の夏場は、大豆が最も水を必要とする時期となります。特に、水が不足すると、花振るいや莢落ち、豆の小粒化、株の青立ち等が生じ、品質や収量の低下となるので、土壌の乾き具合に応じてうね間かん水を行う。
- (2) かん水は短時間で実施し、ほ場全体に水が行き渡ったら水口を止めて速やかに排水する。
- (3) このまま雨が少ない状況が続けば、大豆は、根を深く張ると予想されます。ひとたびうね間かん水を行うと、土中深くの根は傷むので、定期的うね間かん水を行うようにする。
- (4) 地域の用水が不足する場合は、1畝か2畝空けてかん水する。大きな区画（30アール

以上)のほ場では、数日に分けてかん水してもよい。

- (5) 黒大豆及び紫ずきんは、7月下旬から8月上旬に開花期を迎える。開花期以降は、着莢や子実肥大に水分を必要とするため、土が乾燥しないようかん水に努める。開花期から莢伸長期にかけての水不足は、落花・落莢を増長させ、稔実莢数や一莢粒数の減少につながり、減収を招くので注意する。
- (6) 小豆は土壌が乾燥状態で、降雨が予想されない場合は、通常より深播きとする。

### 3 野菜・花き

- (1) かん水は、立地条件や品目、生育状態を十分考慮し、早朝または夕方に実施する。
- (2) 地温上昇の抑制や土壌水分保持のため、マルチや敷き藁などを活用する。
- (3) 施設栽培では妻面開放や遮光資材等を使用し、施設内の温度上昇を抑制する。
- (4) 育苗箱は、コンテナなどでかさ上げして通風をよくする。
- (5) 葉茎菜類では、乾燥によるチップバーンを防止するため、薬剤散布時にカルシウム剤を混用する。
- (6) 葉根菜類の直まき栽培では遮光資材やべたがけ資材を利用し、地温上昇の抑制や土壌水分の保持を図り、発芽率を確保する。
- (7) ネギでは、軟腐病が発生する恐れがあることから、うね間かん水を控える。
- (8) 果菜類では、摘果、若どりを行い、着果負担を軽減するとともに、適切な施肥を行うことにより、樹勢維持に努める。また、黄色く古くなった葉を中心に摘葉し、蒸散の抑制に努める。
- (9) カルシウム欠乏などの生理障害が出やすくなるので、必要に応じて葉面散布を行う。
- (10) ハダニ類やうどんこ病など干ばつ時に発生が多くなる病害虫の適期防除に努める。
- (11) 切り花については、朝・夕の気温の低い時間に採花し、常温で長時間放置しない。また、エチレンによる劣化を防ぐため前処理剤を使用し、品質の維持に努める。

### 4 果樹

- (1) かん水は、早めから計画的に行う。スプリンクラーや散水チューブを使用して、成木園では20mm(20トン/10アール)かん水する。無降雨が7日以上続く場合は、繰り返しかん水する。また、水量を節約するには、早朝又は夕方にかん水する。十分なかん水量を確保できないときは、スポットかん水等工夫する。
- (2) 幼木は根域が狭いので優先的にかん水を実施するとともに、主幹の周りに敷き草、敷わらを行う。
- (3) 土壌の乾燥防止のため、刈り草やワラ等で株元へのマルチングを行う。雑草との水分の競合を避けるため園内の草を刈り取り、その草を用いて株元にマルチングを行う。
- (4) 徒長枝が必要以上に繁茂している場合は、水分消費を防ぐために早急に切除する。また、果実の日焼けを防止するために、棚面の空きスペースを埋めるために徒長枝の誘引や捻枝を行う。
- (5) 園内をよく観察し、ハダニ類・カメムシ類の防除を行う。なお、間もなく収穫を迎える品目では、農薬の「収穫前日数」に十分注意する。
- (6) 高温条件下での薬剤散布は、葉やけ等薬害が発生しやすくなるので、早朝等気温の低い時間帯での散布を行う。

- (7) 土壌水分は表面ほど変化が激しくなるため、普段から計画的に土壌の深耕及び有機物を施用し、地下部の保水力を高めるとともに、根群の発達を促す。

## 5 茶

- (1) 気温が高い時期にはカンザワハダニ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマなどの害虫の被害が大きくなりやすいため、発生初期に、的確に防除する。
- (2) 葉焼けや枝枯れを防ぐために、うね間に敷草するなど、土壌水分の保持に努める。降雨のない日が続き、うね間を掘っても乾燥している場合は、気温の低下する夕方にかん水する。特に、幼木は干ばつの被害を受けやすいので、よく観察して対応する。
- (3) 覆い棚がある茶園では棚に寒冷紗(遮光率60~70%)やよしずを筋掛けする。被覆により、露天と比べて、葉面付近の温度が3~7℃低くなり、葉焼け等を軽減できる。被覆は9月中旬までとし、気温が平年並に下がった曇天日に被覆資材を除去する。

## 6 作業者の熱中症を防ぐ対策

### (1) 作業環境面

- ① 日除けや通風をよくする設備を設置し、作業中は適宜散水する。
- ② スポーツドリンク等でこまめに水分と塩分を補給するとともに、身体を適度に冷やすことができる氷、冷たいおしぼり等を備える。
- ③ 作業中の温湿度の変化がわかるよう、温度計、湿度計等を設置する。
- ④ 日陰などの涼しい場所に休憩場所を確保する。

### (2) 作業面

- ① 健康診断結果などにより、健康状態をあらかじめ把握しておく。日中の気温の高い時間帯の作業は避ける。
- ② なるべく2人以上で作業し、異常が無いか確認しあうようにする。
- ③ 屋外やハウスで人と2メートル以上の距離が確保できる場合には、マスクを外すようにする。
- ④ 十分な休憩時間や作業休止時間を確保する。
- ⑤ 作業服は透湿性、通気性の良いものを、帽子は通気性の良いものを着用する。ファン付きウエアやネッククーラーなどの熱中症対策アイテムも効果的。
- ⑥ 作業が辛いときは無理をせずに日陰の涼しいところで休憩し、水分を補給して、身体を冷やす。

### (3) 健康面

- ① 健康診断結果などにより、健康状態をあらかじめ把握しておく。
- ② 作業開始前や、作業中に作業員間で健康状態を観察する。

### (4) 救急措置

- ① 近くの病院や診療所の場所を確認しておく。
- ② 熱中症は、早期の措置が大切であり、熱中症が疑われる症状が見られたら、以下の手当を行う。
- ③ 意識がない場合には、すぐに救急車を呼ぶ。救急車が到着するまでの間は、涼しい場所に避難させて、服をゆるめて身体を冷やす。

- ④ 呼びかけに応える場合は、涼しいところで安静にする。
  - ⑤ 救急車を呼ぶか迷ったら、「救急安心センターきょうと（＃7119）」に電話相談する。
  - ⑥ 水分を自力で摂取できる場合は、塩分・水分を補給する。できない場合は医療機関に搬送する。
  - ⑦ 安静にして、水分を補給しても症状がよくなる場合は、医療機関で受診する。
- (5) 熱中症警戒アラート
- 熱中症警戒アラートは、熱中症の危険性が極めて高くなると予測された際に、熱中症予防行動をとることを促すため、気象庁の府県予報区等を単位として、前日17時及び当日5時の1日2回、環境省・気象庁が発表しています。

(参考)

[環境省熱中症予防情報サイト - 熱中症警戒アラートのメール配信サービス \(env.go.jp\)](http://env.go.jp)